

「今、私の晴雨計は！④」

「学長10年、現役を終えて」

平山征夫

3月から二か月半晴雨計の執筆を休んでしまった。10年勤めた学長を3月末で退くに当たって書類の整理、引継ぎ準備、引越し荷造りなどに追われていたうえ、4月に入ってから新しく移った新潟市内中心部にある同大学中央キャンパスの「顧問室」の整理、挨拶回り、「現役引退ご苦労様」の会などの日程をこなすのに大忙しだったためだ。

学長室は10年間に溜まった書類や書籍で埋まっていたが、一か月もあれば片付くと思って2月末から取り組み始めたが、想定外

の難作業だった。そのまま出せない書類は焼却に回さなければならぬので分類が必要だからだ。

しかも大学関係だけでなく、10くらいの公職を務めてきたが、その団体関係の書類も加わったため、合わせて大きな段ボール20個近い分量の整理となった。

一方、顧問室を頂いたことは私には何より大きな救いとなった。もし顧問室がなければこれら書籍・書類は自宅に運ぶことになったわけだが、既に本で床もかなり埋まっている我がマンションには到底入らなかつただろうからだ。

そうでなくても「本はもうこれからあの世に行くまでに読める分だけにしたら！」と厳しく家内から言われていた。顧問でいる間だ

け本の収容が延命されたのだ。

ここまで過ごしての印象を率直に申し上げれば「極めて快適の一言である。朝ゆっくり家を出ても中央キャンパスまで歩いて5〜6分だから九時半過ぎには悠々到着、夕方六時頃家に帰るとしてもたつぷり8時間、一人で

読書や調べものに傾注出来る。合間に講演やこれからこのキャンパスで担当する成人向け講座の準備なども出来る。会議やレクがないから殆どが自分で自由になる時間だ。昼食も近いので家に帰ってもよいのだが、三食とも世話を掛ける勇氣は持っていないし、楽しいので今のところ探索と散歩を兼ねて近くのレストランなどを食べ歩いている。近くなった

からと冷やかしに来る友人客は増えたが、それも突然起こった知事選や秋の新潟市長選などを話題に気楽な雑談を楽しんでいる。日銀25年、知事12年、大学人13年（うち学長10年）の計50年の現役生活だったが、最後に教育に携われたことを喜んでいる。自分が体験し学んできたことを若い人たちに伝えることが出来たからだ。学長は通常授業を行わないが、わがままを言って「地域経営論」という授業をやらせて貰った。毎年30〜50人くらいの学生が受講してくれた。授業二年目、私の授業の取り扱いミスで単位にならない「自由科目」扱いされたため、受講生が女子学生一人というところがあつた。週一回90分、15回、

彼女と二人で行う授業は特別の体験だった。究極の少人数学習だった。学生に直接接する授業は、学生の想いを直に聞けるので大学運営にも有益だった。

ある意味ではこの10年は「大学改革」との闘いだった。未整理のまま総理官邸、財界、文科省、財務省、文教族議員など色々な出処から出される「大学改革」要請に振り回されたのだ。知事時代から文科省行政のお粗末さ(?)を実感していた私は、自分なりの大学としての教育方針を「一人一人の異なる才能と希望を持った若者が、自立して社会人としての人生を歩んでゆけるよう、高い専門教育と幅広い人間教育を提供する」と定め、それを基準に「改革

しすぎない大学改革」を推進していった。安倍内閣は目玉として「経済改革」と並んで「教育改革」を掲げていたが、私は一種の警戒感を持って対応した。それは政府の掲げる高等教育の目的が「世界との競争に打ち勝つ大学」とか「社会からの多様な人材ニーズに応えられる大学」となっており、そのため世界の大学ランキング一〇〇に東大、京大の二つしかエントリーされていない現状を五大学への増加とランクアップが至上命令として官邸から出されていた。学生側に立った大学の目的が何も無いことに違和感を覚えた。それで私は上記のような目的を自分なりに立てて、それを判断基準として行動をした。COC

(地域の中心となる大学)支援や大学改革支援補助事業など大学同志を競争させ、文科省の定める要件をより多く満たしている補助金が貰えるような施策には極力応じないようにした。教育政策としての質が悪すぎて、単に競争させるだけで文科省がグリップを強化しようとしているとしか見えなかったからだ。しかし、予算が欲しい事務方からはいつも泣きが入ってきた。私の学長としての大学運営は異端だったようだ。でも間違っただけではなかった。思っている。日本では無理と諦めていたが、本当にやりたかった大学改革は、尊敬する経済学者ヴェブレンと教育学者ジョン・デュー

イの二人がかつて理想に燃えてNYに創った大学のような教育だった。その大学は単位取得の義務や卒業認定などはなく、学生はカリキュラムの中から自分が学びたい科目を選んで学べばよい。先生はそれぞれの学生の才能に合ったカリキュラム選択のアドバイスと有効な授業の提供に専念すればよいのだ。学びたいことを学ぶ、これが本当の大学だと思った。ヴェブレンの日本での研究者だった宇沢弘文さんは自己の教育論の中で「魚に泳ぎ方を教える」教育を薦めている。「本来生まれながら魚は泳げるけれど、それでも魚がより美しく速く泳げるように教育した方が良い」という意味だ(因みに英語で「魚に泳ぎ方を教えるな」というのは

日本語では「釈迦に説法」という意味だ。

私が気持ちを込めていたものがある。入学式と卒業式での学長挨拶だ。特に卒業式での学長式辞は、本学から社会に巣立ってゆく

若者に対するはなむけとエールだから、心に残る言葉を送りたいとど工夫した。その大半は私自身が大切にしてきた言葉であった。

10年間で社会に送り出した約三〇〇〇人の卒業生の心にどのくらい残ったか自信はないが、振り返って列挙してみる。10年の学長としてのメモリアルでもある。

・1年目…入道雲の教え―小学校六年の夏みた巨大な入道雲が何かを語りかけていると思ったが、40年余後に知ったある詩の

中に答えがあった。「白雲は巨人

の如き姿をして 厳しくも私に語った “子よ 大いなる人になれ”と…その言葉は五十路を過ぎた今も啓示となって残っている」というもの。

・2年目…サムエル・ウルマンの詩「青春」とは―ウルマンは米国の社会貢献学者、ケネディ大統領の執務室にも掲げられていた

この詩をいつまでも夢を追い求めて欲しいという願いを込めて送りました。「真の青春は若き肉体にあるのではなく 若き精神の中にこそある…臆病な二十

歳がいる すでにして老人 勇気ある六〇歳がいる 青春真っ只中 年を重ねただけで人は老いない 夢を失った時 はじめ

て老いる…」

・3年目…茨木のり子の詩「自分の感受性くらい」―晩年「倚りかからず」という詩を書いた茨木のように毅然と生きてほしいと願い贈った。「ばさばさに乾いて

ゆく心を 人のせいにするな みずから水遣りを怠っておいて…初心の消えかかるのを 暮しのせいにするな そもそもがひよわな志にすぎなかった…自分の感受性くらい 自分で守ればかものよ」

・4年目…同じ茨木の詩「歲月」…この詩とは裏腹に早くに主人を亡くした茨木はひとり毅然と生き七九歳で亡くなった。遺稿集の

タイトルにもなった「歲月」は瞬間を大切に生きると教えている

と思い引用。「真実を見きわめる

のに 25年という歲月は短かつたでしょうか…ふんわりとした翁と媪になって もう行きましよう と 互いに首を絞めようとして その力さえなく尻餅

なんかついている姿 けれど歲月だけではないでしょう たった一日っきりの稲妻のような 真実を 抱きしめて生き抜いている人もいますもの」

・5年目…ヴィクトール・E・フランクルの「夜と霧」―オーストリアの精神科医でユダヤ人と

言うだけで強制収容所に入れられ、極限状態から奇跡的に生還したフランクルは、この著書で「絶望の中でも生きようとし、生きる力を与えてくれるのは、肉体の頑

健さではなく、精神性の高さ、豊かさであることに気付いた」と述べている。生きがいを持つことの大切さを言いたかったので引用。

・6年目…ソースティン・ヴェブレンーノールウエー移民の子で米国の経済・社会学者、ケインズの先駆者でもあるが、学問上の功績に比しセクハラ事件などを起こしたのが災いし、教授にもなれず社会的評価が低いまま、一九二九年八月、二か月後に起こるウォールストリートの株価暴落・世界恐慌を予告して亡くなった。その根拠となった「人間は絶対的豊かさで満足できず、相対的豊かさのみ満足する動物である。だから激しいバブルが起こる」というのは人間の本質を見抜いている

鋭い。「人間性を大切に生きて欲しい」ということを伝えようとしたもの。

・7年目…インド独立の父マハトマ・ガンジーー全力を尽くして夢を追い求めた人生こそ納得できる人生であることを言うための引用。「重要なのは行為そのものであつて結果ではない：正しいと信じることを 行いなさい 結果がどう出るにせよ 何もしなければ何の結果もないのだから」
・8年目…茨木のり子の詩「自分の感受性くらい」の抜粋とスペシャルオリンピクス(知的障害者のスポーツ大会)の全国大会を終えての感想ー知的障害の若者が集まっって行うスポーツ大会は、身

体障害者のパラリンピクスとは全く異なり、順位ではなく全力を尽くすことを大切にしている。だから頑張ったアスリートは全員表彰する。皆表彰台で皆同じように笑顔だ。社会では自分のことは自分で責任を持ってやると同時に、互いに譲り合い助け合うことが大切であることを意識して欲しかったから。

・9年目…アップル社の創業者スティーヴ・ジョブズー常にやりたいことにチャレンジし、自分を信じて困難にぶつかりながら進んできた彼の多くの言葉から「持っているテクノロジーをすべて引き換えてもソクラテスとの午後のひと時を選ぶ」という洒落た言葉と「もし今日が人生の最後の

日だとしたら、今やろうとしていることは、本当に自分のやりたいことだろうか」を引用。

・10年目…ヴィクトル・E・フランクルーフランクルを五年目に続いて二度目かつ締めくくりに登場させたのは、私自身がポーランドを旅してアウシュビッツの強制収容所を訪れ、強い印象を受けたことと、平和を最も大切にしたいと思っていたからだ。「人間はどうしてこんな残虐行為をしたのか」という疑問と共にこの過酷な状況の中でも生きがい最後まで捨てなかったフランクルの「どんな時も、人生には意味がある。どんな人のどんな人生であれ、意味がなくなることは決してない」という言葉は重い。

これから長い人生を送る若者に
伝えたかった。

(平成30年5月22日)